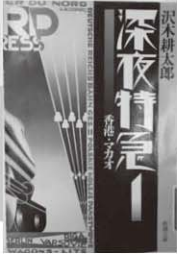


入賞作品紹介

〈高松キャンパス 読書感想文〉



優秀賞
深夜特急に乗って
建設環境工学科3年 河野 里矢香

私はこの夏、沢木耕太郎の「深夜特急」を読んだ。この本は、作者がデリーからロンドンまでを乗り合いバスだけで旅をした体験記である。途中、作者が通った国々のエピソードがたくさん集められている。

“まるで何の意味もなく、誰にでも可能で、しかし、およそ酔狂な奴でなくてはしそうなことをやりたい”と始まったこの旅に私は引き込まれていった。ちょうど、私自身も今の生活から逃げだしたいと、誰も私を知らないところに目的もなく行ってみたいと思っていたところで、作者の姿に自分を重ねていた。いろいろな国でのエピソードの中には、私と作者の考え方や、私と現地の生活との共通点や相違点が見つかり、改めて自分の生活を見直すことが出来た気がする。

例えばマカオのカジノの話である。普段カジノには縁もなく、賭け事などしたことのない私にはとても新鮮で、ディーラーと客との駆け引きに興奮した。賭博がいんちきであることはわかっていたが、あまりに卑劣な手口で金を稼ごうとするディーラーに怒りを覚えた。カモになったオバサンの敵討を考えた作者に共感した。

作者がブッダガヤでアシュラムという孤児院のような所に行った時の話も印象的であった。同じトラックの荷台に乗せられていた二人の少女の姿を作者は、“彼女達の放心したような表情の奥に、もう自分の身にどんなことが起ころうと驚きはしない、といった絶望的な無関心さが隠されている気がした。”と記している。しかし、そんな彼女らも、他の子供達とふれ合い、安定した生活を送っていくうちに、外界への好奇心を取り戻すことが出来たのだ。子供の瞳に希望の光が無いことほど悲しいことは無いと思う。しかし、世界には希望を失った子供たちもたくさんいる。そんな子供達にとって、このアシュラムのような施設は救いの場所であると思った。たとえそこでの生活が自由気ままな生活とはいえなくてもである。

また、マレーシアの青年による反日運動についての会話には、工学を学ぶものとして、知っておかなくてはならない一節があった。彼らは、日本企業のマレーシア進出に不満があるというのだ。ダムを作れば日本の資材と技師で作ってしまうし、工場を作れば組み立て工場ばか

り。マレーシアの人には何一つ勉強させず、安い賃金でこき使うばかりだということらしい。私は、日系企業が進出していかないと、仕事の少ないマレーシアは困るのではないか。ならばなぜ反日運動なんてするのだろうかと思った。しかし、彼らの言い分は、私のそれとは違った。確かに日本企業が進出してこないと困る。だからこそ、それをいいことに搾取することしか考えない日本人が頭に来るのだった。

立場による感情の違いを知り、お互いを理解するためには、直接話をしてみないといけないと感じた。

マレーシアからの留学生とも親しくする機会のある私には、少し実感の湧いてこない話であったが、そのようなことがあるというのを知ると、学習に対する気持ちも変わるような気がした。

作者は旅の中で、何百、何千もの物乞いと出会ったが、そのたった一人にすら金を恵まないと決めていた。人にモノを恵む筋合いもなければ資格もない。人が人に何かを恵むなどというのは傲慢な行為であるという。私もそう考えていた。しかし、そんな旅人の一般論を気にもせず、子供たちと残り少ない全財産を等分で分け合っている仲間を見た作者は疑問を抱いた。自由な旅の中で、わざわざ理由をつけて「恵むまい」と決める必要はなかったのではないかという気になり、自由とは何かを考えたのだ。

私は普段、自由と言われると、困惑して自分の中に枠を作ってしまう。白か黒かはっきりさせようとしてしまう。でも、それは自由とは違う気がする。これを機に、自分が今まで作ってきた枠をなくしてみたいと思った。そうして初めて、自由が始まる気がした。

この本の中で作者が出会った子供達のほとんどは、貧しくても、無邪気で楽しそうに日々を送っていた。私は「貧幸」という言葉を思い出した。豊かであることと、幸せであることは、イコールで結べるのか。日本人は豊かなのか。日本の子供達は本当に幸せなのか。改めて考えさせられた。

私も作者のように生活の全てを投げだして全財産を持って旅に出たいが、実際にそんな思い切ったことはできないと思う。この本を通して作者の体験の一部でも知ることができて、じっくりと考えられて良かったと思う。

『深夜特急』 沢木耕太郎 新潮社



佳作
「伝える」
1年2組 桑村 優花

綺麗、だ。使い古されて安っぽくなってしまったこの言葉が、その詩の中で淡く、儂く発光する。私の瞳は、その不思議な光をぼんやり映している。光は、息を詰め

ると一度瞬いて日常の海に回帰する。瞼をあげた次の瞬間には、もう彼らはどこにもいないのだ。流れ行く時にもまれてその光を失った言葉が暗がりから結んだ蕾。一瞬のうちにほころんで、色めいて、踵を返して、散っていく。そんな光景を十八行の活字の中に私は見た。

レモン哀歌という名の詩集を買った。著者の作品の中でも特に有名なものだから知っている方も多いだろう。買った理由は特には、ない。ただ暇つぶしと、読書感想文という名のラスボスを倒す為の道具が欲しかっただけだ。夏休み終了三日前、ラスボスよ、いざ尋常に勝負といこう。

突然話が逸れて申し訳ないのだが、私は基本的に明治、大正、昭和と少し古い時代に生まれたものに惹かれる性質がある。小説にしても某空想特撮シリーズにしても、大抵その時代で作られたものに魅せられどっぷり彼らの世界に引きずりこまれてしまうことが多い。おかげ様で、某光の巨人の世界から抜け出せず、かれこれ八年もたつことになる。全く、本当に恐ろしいやつらなのだ。

ここで少し考えてみたい。なぜ私はそこまでその時代に固執するのだろうか。今の生活からの現実逃避という理由も確かに含まれている。だが、それ以上に私を縛り付けて止まないその要因。それは、単語の一つ一つが寂れることなく輝いて、それぞれの世界の中で生きているからなのだと思う。

ここで、詩集のなかから「冬の言葉」という詩を引用したいと思う。

冬の言葉

冬が又来て天と地とを清楚にする。

冬が洗ひ出すのは万物の木地。

天はやつぱり高く遠く

樹木は思ひきつて凜らかだ。

虫は生殖を終へて平気で死に、

霜がおりれば草が枯れる。

この世の少しばかりの擬勢とおめかしとを

冬はいきなり蹂躪するする。

冬は策の扇を吹いて宣言する、

人間手製の価値をすてよと。

君等のいちらしい詩をすてよ、

君等が唯君等たる仕事に猛進せよと。

冬が又来て天と地とを清楚にする。

冬が求めるのは万物の木地。

冬は鉄槌を打つて又叫ぶ、

一生を棒にふつて人生に関与せよと。

十六行からなる、至って標準的な長さの詩だ。もし貴方に少しばかりの時間があるならば、ぜひ一度声に出して読んでほしい。五七五のような定められたものではないのだが、何となく読んでいてずっとするリズムだと思うので。

さて、どうだろうか。少々なじみのない言葉も見かけられたが、単語自体はそこまで難しいものではなかったように思う。仕事、霜、冬、宣言。普段の会話に混ざってもさほど違和感はないだろう。今更、特に珍しいものでもない。だが、この詩の中ではどうだろう、言葉たちが身体についた垢を取り払って、細く、鋭く、光を放っている。私は、こんな言葉を、日本語を知らない。磨きぬかれた言葉で書かれた詩がいつも簡単に心の防衛ラインを突破して、直に著者の意図した響き、想いを一瞬のうちに澄み渡らせていくのだからたまたまのものではない。文字通り涙腺崩壊、というやつだ。思考がやっと言葉を捕らえたときにはもう、遅い。余計な思考を白に還す黒い波が、私の中をどうしようもなく暴れまわっていたのだから。

そんな繊細な言葉に一番困らされたのが、表題作「レモン哀歌」だ。有名なものなので抜粋は省かせていただく。

何度も繰り返すが、本当に研ぎ澄まされた言葉たちだとつくづく思う。レモンという何でもない単語が、目に入れた瞬間に爽やかな香りをぱっと振りまいて目の前の霧を振り払う。著者の想いが通る道を作るのだ。そして、音もなく著者のこめた愛とやらが、我が物顔でその道を通り心の隙間を侵食する。すると、どうだろう。私の幼い中心が抱いたこともない恋情や愛情にかられ、彼が注いだ想いの丈だけ、心臓が意図せず締め付けられていくのだ。それらを止める術など私は知らない。結局最後には、こんな風に純粋な想いに貫かれるのも悪くないと思うまでに、私は彼らに侵食されつくされてしまったのだった。

詩集を読み終えて私の中に残ったものといえば、やんわりとした暖かさ、著者への羨ましさだろうか。私は元来、人とコミュニケーションをとることを大変不得手とする人種だ。喋るにしても、メールにしても、伝えたかったことの半分も伝わることなく会話が途切れてしまうのが日常茶飯事である。だから、ここまでストレートに想いの全てをぶつけられる著者が本当に羨ましいと思うのだ。このすごく忙しい時期に、うっかり詩の勉強でもしてみようかな、などと思わされてしまったのは不覚だったが、この詩集を通して伝えるという行為の大切さを再認識することができた。せっかくだし、この機会に伝えることをもう一度練習し直してみようと思う。長い間放棄していたその行為を自分のものにするのは容易なことではないだろう。だが、そこら中に捨て置いてきた想いを拾い上げて昇華させてあげられる日がいつかきつとくる、と信じて、今日も不器用にも生きていこうと思うのだ。

『レモン哀歌』高村光太郎 集英社

〈高松キャンパス 千頁読破記〉



優秀賞
江戸の数学教科書
電気情報工学科3年 森田 稜也

江戸時代、鎖国中の日本には「和算」という独自の数学があったそうだ。西洋の数学とはまったく違う道筋をたどり世界最先端のレベルに発展したというのは大きな驚きだ。しかも大学受験があるわけでもないのに、ふつうの庶民が高度な数学の問題を現代の私たちがテレビゲームを楽しむように喜々として取り組んでいたというのだから二重の驚きである。ちょんまげを結って質素なくらしをしていた人達が高等数学なんて…とあなどっていたがよく考えてみれば、江戸時代はおろかそのはるか以前よりも前から日本には美しい神社仏閣をはじめ城や橋などの建築物があり正確な暦もあったのだから数学が発達していたのはあたりまえの事だといまさらながら気がついた。

「江戸の数学教科書」という本によると奈良時代には中国から「九章算術」という数学書が持ち込まれたそうだ。そこでは土地の測量、穀物の換算問題、面積を求める図形問題、建立方程式などを幅広く扱っておりピタゴラスの定理なども出てくるそうだ。

しかしこの時代の数学はまだ日本独自のものではないし、まだごく一部のエリートの中だけの知識であったと思う。ではなぜ江戸時代では地方の農村で暮らす庶民までが数学の勉強をしていたのだろうか。それは江戸時代の大ベストセラー「塵劫記」と算額という日本独自の数学文化のおかげのようだ。算額は今でも日本各地の神社仏閣に多く残っている。調べてみると地元香川県にもいくつかの神社や資料館に算額が残っていた。

当時の人々はどういう気持ちでこの難問を解いていたのだろうか。受験があるわけでも、生活に役立つわけでもないのに…ただ純粋に数学を楽しんで難しい問題を解いた時には大いなる達成感を感じていたのだろうか？現代の私たちがゲームをクリアした時のように…だとしたら、今の私たちよりよほど昔の日本人は知的レベルの高い精神的に豊かな生活を送っていたのかもしれない。楽しいから学ぶ、おもしろいから考える…

私はもう一度何の為に学んでいるのかよく考えなければならぬと感じた。学校も決して強制的に勉強させられる所ではなく学生の興味のある学問を提供してくれるだけで勉強をするのは自分自身である。私は勉強を江戸時代の人々のように楽しんでいきたいと思った。

『江戸の数学教科書』桜井進 集英社 176 P

『和算で遊ぼう』佐藤健一 かんき出版 143 P

『江戸のミリオンセラー』佐藤健一 研成社 200 P

『雪月花の数学』桜井進 祥伝社 199 P

『感動する数学』桜井進 PHP 研究所 236 P



佳作
伊坂幸太郎読破記録
電気情報工学科2年 鈴木 雅敏

私が伊坂幸太郎の本にであったのは、ちょうど一年前の今頃だった。書店の文庫本の棚に置いてある「終末のフール」の帯にひかれ購入して以来、私は伊坂氏の世界に魅了されている。

伊坂氏の本には言いようのない魅力がある。面白いとも違う、興奮させるような展開が多いわけでもないが、なぜか続きが読みたくなる。こればかりは読んでみなければわからないと思うが、これまで私が読んできた本にはないタイプの話が多い。勧善懲悪ではないことや、主人公やその周りの登場人物が皆善人ではないといった特徴のためかもしれない。これらは総じて現実の人生にも当てはまることではないかと思う。しかし、その舞台背景は決して現実のものではなく、むしろファンタジーなものが多い。このずれが伊坂氏の魅力とも言えるだろう。

伊坂氏の本に限ったことではないが、本が現実を語ることはあまりない。しかしその垣根を越えて現実の私たちに訴えかけてくることは多いと思う。私もこの伊坂氏の本から大きな影響を受けていると言える。特に「終末のフール」では、もうすぐ世界が終わるという中で、それでも必死に生きている人達の姿に深い感銘を受けた。一人ひとりがそれぞれの物語を紡いでいる。脇役なんて一人もいない。そんな訴えが聞こえてくるような気がした。

しかし綺麗言ばかり並べた本というものが面白い作品だとはいえない。言うだけなら誰にでもできるからである。ならばなぜ伊坂氏の本はこうも魅力的なのか。これは私の勝手な考えにすぎないが、それは登場人物が人間臭いからではないかと思う。この人の本に出てくる人は、汚い人間が多い。強盗を働くこともあれば、母親の仇に人を殺すこともある。しかしそういう人間の葛藤や後悔する姿というものは決して汚いものではなく、むしろ人間として誰もが持っている一面に親しみを覚えることもある。また、必死に努力してもそれが報われることがなかったり、大きすぎる問題に挫折したりする様から、人生の理不尽さというものを感じることもある。これらは

誰しも経験することだろう。つまり登場人物と自分を重ね、物語にのめりこむことができるのである。そこに私は魅力を感じる。

本は人生の教科書ではないか。私がこの夏読書したことによって感じたことである。本に書いてあることを参考にして生きるもよし、反面教師とするもよし。読んだ人それぞれが何かを感じ、自分の価値観を決めていくというのは何より素晴らしい人生の道しるべだと思う。

『終末のフール』 伊坂幸太郎 集英社 304 P

『死神の精度』 伊坂幸太郎 文藝春秋 345 P

『重力ピエロ』 伊坂幸太郎 新潮社 337 P

『アヒルと鴨のコインロッカー』 伊坂幸太郎
東京創元社 384 P

〈詫間キャンパス 読書感想文〉



1位
命の重さ
情報通信工学科5年 田岡 愛巳

東野圭吾さん著作の『手紙』には、近年見失われつつある本来の命の重さが切々と綴られている。弟をどうしても大学に進学させたかった兄が強盗殺人を犯してしまう。それ程に追い詰められていたし、弟を愛していたのだが、兄の罪は弟を苦しめ続ける。世間からの差別や偏見を浴び続ける弟は塙の中で暮らす兄からの手紙を呑気に感じ、次第に憎らしく思い、ついには兄と絶縁して生きることを選ぶ。

人生を投げうってまで自分に尽くしてくれた兄を断ち切った弟に私は非道さを感じなかった。むしろ同じ環境に立たされれば、もっと早くもっと残忍に兄へ絶縁状を突きつけたのではないかと思う。そして、そこまで弟を思い至らせた世間からの迫害も理解できた。命を奪う罪の深さを恐ろしい程生々しく感じ加害者だけではなく、その家族にまで飛び火する犯罪者差別に胸が苦しくなった。連日のように凶悪事件がニュースに流れる現在、ようやく加害者家族の保護に焦点が当てられる機会が増え、世間の意識は多少変わったとは思いますが、物語の中で弟が受け続けた精神的な差別はそう簡単に無くなるものではないと思う。それ程命は重く、それを奪う罪は途方もなく深い。しかし、その一方で命の軽視が社会問題となっている。私の生活する環境もその例に漏れず、感慨なく日常を重ねていると命の価値を見失うことがままある。つまり、「死ぬ」だとか命を否定する言葉が簡単に

飛び交う中で日常を重ねていると命の感覚が狂うのだ。そしてギクリとする。本来の命の重さを思い出し自分の感覚にゾットして後悔する。『手紙』を読み終えた今は胸にずしりと命の重さを感じているが、また見失ってしまうことがあるかもしれない。それに気付く度に『手紙』を読んで再認識した命の重さを思い出し、しっかりと悔い改めたい。そしてどんな環境にいても命の価値を見失わない自分になりたいと思う。

若者の命の軽視への対策もその目的の一つとしてゆとり教育が実行され、私もゆとり世代なのだが、ゆとり教育によって命への価値感が変わったとは思えない。削られた授業時間の有効な使い方を知らなかったし、それができる程大人でもなかった。しかし、空いた時間でもっと本を読めば良かったと思う。『手紙』のように大切なことに気付かせてくれる本は多くあるからだ。今回読書感想文を書こうと決めた一番の理由は『手紙』を読んで感じたことの大きさと深さ、その大切さを通して本を読む素晴らしさを伝えたいと思ったからだ。テレビやインターネットの普及で若者の活字離れが懸念される現代だが、世の中に読みきれない程に存在する本の一つ一つに大きなメッセージがある。どうかそれに触れて沢山のことを感じ、命の重さを感じて欲しい。命は、ゲームの中のように復活しなければ、人生をリセットすることもできない。人を傷付けることは簡単だが、それと同じ手を使って口を使って心を使って人を大切にすることもまた簡単であり、とても大切なのだと感じさせる一冊に出会えば素敵だと思う。

『手紙』 東野圭吾 毎日新聞社



2位
海と毒薬
情報工学科2年 瀬戸 友太

この本が実際にあった話を基にしていると知ったとき、私は心の中にモヤモヤしたものを感じた。遠藤周作の海と毒薬である。

昭和二〇年、アメリカ軍捕虜の飛行士八名が生きたまま、十二名の医局員によって解剖された。罪悪観を感じながらも権力に押し負け、生体実験に参加した勝呂研究生が主人公である。

人体実験は、道徳的にも倫理的にも決して許される行為ではない。これには多くの人が理解を示すことだろう。しかし。

桜の花びらが散るように命が奪われていく。それが戦争だ。常識が通用しない状況の中で、敵国であるアメリカ軍捕虜の命が、日本で一体どれほど大切にされていたのだろうか。人間らしい扱いなど到底期待できないだろ

う。死んだ方がましだと言うかもしれない。

そんな状況でも生体実験は人の道に外れた行為なのだろうか。戦争で人を殺すのは良くて、実験で殺してはいけない理由とはいったいなんだろう。自分で必死に考えたが答えは一向に出ない。しかし、誰になんと言われようと納得できないだろうと同時に思った。

そして、勝呂が実験に参加した背景に、権力が関係しているのは紛れもない事実だ。天皇、軍部、教授・・・参加を拒めば反逆者と呼ばれ勝呂自身が間違いなく殺される。捕虜八名の命と勝呂の命一体どっちが重いのだろうか。これも答えなど決して出せない。しかし、どちらの命も強大な権力を前にすれば価値などないのではないか。

「海と毒薬」というタイトルは、遠藤が物語の舞台となったF市にある大学病院の屋上から景色を眺めているとき思いついたという。しかし、勝呂を残酷な行いへと導いてしまった権力が海、そして人間の道徳や良心を麻痺させてしまう状況こそが毒薬ではないだろうか。

行動原理に罪と罰の意識が欠如している典型的な日本人として登場し、自らの身を案じたがために解剖に加わってしまった勝呂。道徳規範を振りかざしたところで、結局、人は集団意見に押し潰され残酷な行いをしてしまうのだろうか。

権力という壁は現代にも十分残っている。将来、私の前にも必ず立ちちはだかることだろう。そのときは「本当に大切なこと」を見失わず、自分の信じた道を進んでいきたい。

『海と毒薬』 遠藤周作 新潮社



2位 失敗の意義 情報工学科5年 今川 由依子

これまでの人生で一度も「失敗」を経験したことがないという人はいるでしょうか。

失敗せず、そつなく完璧に生きていくこと。それは一見凄いことのように感じられるかもしれませんが、誰もが「失敗に育てられた」という経験を持っているはずだと思います。今まで幾多の失敗を重ね、それと向き合うことで成長してきたのではないのでしょうか。

この物語の主人公であるまりもが、妹を刑務所に送り込むため行っていた活動の数々、そして少年法に対する過剰な嫌悪。それらは全て、彼女の失敗を恐れ過ぎる性格に起因するものではないだろうか、と私は感じました。

まりもは小学校の頃に一度万引きをしてしまい、その現場を妹に見られたのではないかと激しく恐れます。それ以降ずっと、妹に対して隠れた恐怖を抱き続けているのです。

もしまりもが、万引き事件の後すぐに、いや、事件からずっと年月が経った頃でも構わないから、自分の罪ときちんと向き合うことができたなら、状況は変わっていたのではないのでしょうか。それが叶っていれば、この物語の最後が「まりもの自殺」という、ショッキングな展開で締め括られることはなかったでしょう。

完璧であり続けることに固執し、失敗を恐れるばかりでは、いつかこんな風に破綻が訪れるのかもしれませんが。まりもの二度目の「失敗」から、そんな風に思いました。彼女が自分の罪に対して納得し、妹の過去を認めようとしてあげられたなら、二人の未来は幸せなものだったのではないのでしょうか。

失敗をしても、決して逃げずに正面から向き合うこと。失敗から学んで今後に繋げること。そして、他人の失敗にも寛容になること。完璧であることなどより、ずっと大切なことだと思います。

自分の嫌な面や、できないことと向き合うのは、とても苦しいことです。ですが、逃げていても変わることはありません。誰も変えてはくれません。

私も、失敗から逃げず、自分を失くすことなく生きていきたいです。そして、自分に成長の機会を与えてくれた、今までの数々の失敗に感謝したいと思います。

『非行少女を処刑しろ!』 桃瀬葵 集英社



3位 「きな子」を読んで 情報通信工学科2年 中西 一哉

映画などで今、話題になっている見習い警察犬きな子の小説を読みました。これは、一生懸命訓練をするけど、生まれつきのドンくささでなかなか警察犬になる為の試験に合格できないゴールデン・リトリバー「きな子」と警察犬の訓練士の見習いである「杏子」の物語です。

父に憧れて訓練士を目指す杏子が入った番場訓練所で二人は出会います。初めは体が弱くて訓練どころでなかったきな子を杏子は自分のパートナー犬に選びます。ここで僕はとても不思議に思いました。何故、あまり見込みのないきな子を選んだのかということです。僕が杏子ならきな子だけは絶対に避けると思います。でも後になって杏子が「素質がどうという問題じゃない、本気できな子を警察犬にしたい」と言いました。その意味がこの言葉を通して分かりました。父のパートナー犬であったエルフも初めはドンくさい犬だったけど訓練するうちにみるみる上達し、優秀な名犬となりました。杏子はこのエルフときな子のドンくささが似ているから、それとにより、素質がなくとも努力次第で優秀になれるということを周りに知らしめようとしたのだと思います。

訓練発表会に出るのが決まった二人は毎日厳しい訓練をし、発表会を迎えます。結果は大失敗で杏子が落ち込んでいると、突然きな子が倒れ病院へ行きます。理由は疲れで、所長は「杏子のためにきな子は頑張っていた」と言いました。そこまでなる程きな子が頑張るのは杏子の真剣さが伝わったのだと思います。同じ訓練所にいる訓練士の悠介はジャックという犬に対して、全く愛情のない厳しい接し方をしていました。しかし、杏子ときな子を見て心を入れ替り、最終的にジャックが相棒になり二人で独立していきました。これを見て僕は、杏子ときな子に対する愛情と真剣さが悠介を変えたのだと思います。

この二つのエピソードから、一生懸命やれば、周りの人にもそれが影響するという事です。僕も一生懸命になっている人に影響されて、頑張ろうという気持ちになることがあります。

物語の一番最後がやはり、一番感動しました。きな子とやっていく自信を無くした杏子は、きな子を東京の会社に引き渡してしまいます。杏子も訓練所を去ってしまいます。ある日、その会社のきな子が出るイベントに杏子は足を運びます。感動の再会のはずが、天気は大荒れで杏子のいた訓練所所長の娘、新奈が行方不明になります。そこできな子と杏子のコンビで見事新奈を助け出しました。

この時、杏子は父の言った「どんな困難も一緒に乗り越えるパートナー」を思い出し、きな子を信じて助けを求めます。犬に言葉は通じないけど、どんな事でも乗り越えてきた二人だからこそ、互いを信じてこんなことができるのだと思います。心で通じあっています。

僕はこの物語を通して、無駄なことはない、それと人間と動物のように言葉では伝わらなくとも信じあうことで心で会話ができるということを感じました。最近は、ケータイでメールやインターネットの書き込みでコミュニケーションをとったりすることが多いです。でも本当にそれでいいのか疑問に思います。この二人が心で通じあうようになったのは互いのことを実際に肌に触れて感じたから。そして絆が生まれました。今のこの時代はそれが必要だと思っています。インターネットの時代だからこそ、こういうコミュニケーションが大切だと思っています。最近の人としてどうかと感じるニュースも、この二人を見習えば減っていくはずです。

僕も、ネットばかりでなく、これから社会に出るために様々な人と触れあって、色々なことを学びたいです。

「きな子」 百瀬しのぶ 小学館



3位
一日の小さなかけら
情報工学科5年 柏原 麻美

「お前って、何が楽しくて生きてる？」急に、この問いを聞かれてあなたならどう答えますか。この本の沢野さんは、「仲間と飲みに行くこと、会社から家に帰って子供の顔を見ること、一つ一つはどうってこともない、次の日になれば忘れてのことばかり、でも毎日、毎日、そういう小さなものを積み重ねて、俺は何とか生きていける。」と答えます。私は、この答えにすごく共感しました。この問いに何人の人が立派な明確な答えを言えるのか分かりませんが、私はこの答えがすごく素直で人間らしくて好きだなと思いました。

日々、嫌なことはたくさんあります。私は学校がすごく嫌いで、何回も辞めようと思いましたが、でも、アルバイトを始めて、学校帰りに行きだして、一日の楽しみとなり、毎日を乗り切ることができました。今だに、学校は好きではありませんが、アルバイトで様々な人と出会い、そんな考え方もあるんだ、と気づくことが出来ました。今までは、ただこの学校に入ったことを後悔していましたが、今では、後悔するのではなく、就職してから自分なりにがんばり、高専に入ってよかった、この会社に入ってよかった、と思えるようにすることが目標です。

「意味を求めると、うまく泳げなくなる。意味さえ求めなければ、体が勝手に楽なフォームを探してくれる。」

この本に出てくる人はみんな、少しずつ疲れています。現実でも、少なからず疲れていると思います。そして、年を重ねるごとに、少しずつ変わっていく。先日、中学校時代からの友達と集まりました。もう、卒業してから五年経つのか、と驚きました。五年たつと、みんな色々で、県外の学校に行っている子、働いている子、子供生まれた子。五年経ったのだな。と改めて実感しました。でも、話す内容や雰囲気は何も変わらず、すごく楽しかったです。何才になっても、こうやって集まればか話したいと思いました。集まっていたのは、たった一日だけど、卒業してから五年、一人一人嫌なことも、苦しいことも乗り越えて、今があるんだなと思うと、すごく不思議な気分でした。

私は、この本を何回読んだか分かりません。読む度に、違う感想を持ち、「自分」のことを考えます。ただ、いつも最後は前向きに「がんばろ！」と思うことが出来ます。また、少し疲れた時に読んで、「自分」を見つめたいと思います。

「真夜中の五分前」 本多孝好 新潮社